

# 南方（仏印）

## 仏印駐屯軍

### 司令部の衛生兵（詳述）

#### 一 衛生兵教育

福井県 松塚 喜代隆

昭和十七（一九四二）年四月、私は現役兵として福井県鯖江歩兵第三百三十六連隊砲中隊に入隊しました。鯖江歩兵第三百三十六連隊と言えば、古くは日清・日露の戦争でも日本国に鯖江第三百三十六連隊有りと名を轟かせた強力な連隊です。その平素の訓練教育の厳しさは入隊しなければ分からない。

初めて経験するその無情の私的制裁、それは個人の失敗が結果的に全員の責任となり、思わぬピンタが飛んでくる。そして二、三カ月は一体何が原因で叩かれるのか悔しくて、床に入っては何度も泣き腹が立ちましたが、ただ我慢また我慢でした。

そして初年兵として、六カ月間の教育を受けた成果を連隊長及び部隊本部の将校に見て戴く第一期の検閲の日がやって来ました。中隊を出発する際に班長は「最初に最後の検閲だから、連隊長はじめ各将校が近くへ来られた時には、特にキビキビした動作で初年兵らしさを示してくれ」と檄を飛ばしました。検閲の将校達は実戦そのものを演じている兵隊の傍らを馬上からジツと眺め、時に

は質問にも答えて、一日の検閲は終了しました。

夜の点呼が終わり班長から「長かった訓練の六カ月、良く辛抱し、第一期の検閲を終了する事ができた。ご苦労だった。これで一応卵からヒヨコに成長した訳だ。連隊長からもお褒めのお言葉を戴いた。今夜はゆっくり眠ってくれ。終わり、解散」の言葉があった。

朝、点呼が終わると班長は「今日から演習はない。今後は営内で自分でできる専門業務を廊下の黒板に書いてあるから夜の点呼後班長に申し出ること。よいな、では終わり」と。黒板には測尺手・炊事・酒保・事務室・縫製・被服・馬の蹄鉄工務兵・鞍工兵・衛生兵等が書かれていた。

仲間に衛生兵の希望者の無いのは何故かと尋ねると「第一入試があること、六カ月間の難かしい勉強があること、仕事全般が汚い」などと言う。

私は人助けができる衛生兵が良いかなと軽い気持ちで班長に申し出たところ、班長は「君が衛生兵に最適任だよ」と笑いながら「中隊では年に一人

しか誕生しないのだから是非頑張つてやってくれ」と励ましてくれました。

翌日、医務室で衛生兵の試験が実施され、各中隊より受験に十人余り来いました。医務室の下士官からは「名前を呼んだ者から別の部屋に入ってくれ」と言われ、順番に部屋に入りました。全部で十七人でした。机の上に鉛筆と答案用紙があり、私はその配られた答案用紙を眺めた時に「これは非常に簡単だ」と思いました。私は学校を卒業した時に商人になりたくて繊維問屋へ丁稚奉公に行き、ソロバン、習字、計算専門でしたから、答案も早々に書き上げてしまいました。

三日後、中隊の人事係は松塚、医務室での試験の結果、「君は八十八点でトップ合格だった。二、三日後に始まる衛生救急法の勉強にも頑張つてくれよ」と励まされました。そして翌日から連隊の隣にある鯖江陸軍病院で、中隊十七人、陸軍病院十五人、合計三十二人の六カ月間の衛生救急法の学科が始まりました。

翌日から医務室で朝八時二十分に集合、陸軍病院では八時三十分から授業開始です。午後は十二時四十分が始まりました。そして我々の指揮は一中隊より一週間交代で選び、いよいよ本格的に教育が始まりました。この教育が軌道に乗ってきたと思つた矢先、病院の兵隊より「今日帰りが三十分程遅れるから承知してくれ」と昼食に帰る時に連絡を受けました。

一体何事だろうかと、皆で病院の空き室で待つていると古兵が二人来て一同を整列させて「一言注意する。君達の今の態度はどうなっているんだ。病院の看護婦を一体どういう眼でみているのか。看護婦にも一応階級があるんだ。そしてお国のために日夜働いているのだ。君達よりは偉いのだ」と、言つたかと思うと一人がスリッパを脱いでパンパンパンと、その早いことにこちらが驚きました。そして「良く分かつただろう」と一言残して立ち去つて行きました。結局何の為に叩かれたのか理解に苦しみました。

病院の学科は包帯術・担架・人工呼吸法など半分位教わつた頃、教官から「今日は午前中に、一番大切でまた一番厳粛な人体解剖の実験を、午後には犬と兎の解剖を行うから皆真剣に勉強して欲しい」と伝えられました。午前九時に病院の古兵が二人、白衣を着てマスクをして、病院の死骸室より死体を手術室へ運んで来ました。そして死体を手術台に乗せる。私達は無我夢中で台の上を眺めていました。

まず骨鋏で胸を三角に切り、それを取り除くともう肺・心臓・胃・腸と内臓は一目瞭然で、次は胃・腸・十二指腸・直腸・心臓等を膿盤の上に並べ、一つ一つ例えば十二指腸なれば何メートルあつて、どんな機能を持っているかを説明してくれました。最後は臓器は全部元の場所に納めて、上から胸の骨を当て、一号絆創膏で奇麗に貼り合わせて全体を消毒して、全員黙禱して死骸室へ返納しました。

そして午後はやはり犬と兎の解剖実験ですが、

私達には大事な大事な教育の為とは申せ半分犠牲となる罪の無い動物が、今麻酔で眠らされて、私達の目の前で内臓やその位置及びその機能等を逐一詳細に説明される教材に供されています。だから私達は納得行くまで真剣に聞き、一生懸命に筆記しました。そしてその後六カ月間で衛生救急法の全課程を終了卒業となりました。そのためには毎晩消灯後、厠で股木に新聞紙を敷き、薄暗い電灯の下で深夜まで勉強に励みました。

一方、中隊の不審番と隊員の健康と室内温度管理などの衛生業務に携わっていました。そしてどうやら陸軍病院での卒業式となりましたが、その卒業式は誠に簡単なものでした。ただ机を並べた者同士が互いに肩を叩いて「世話になったな、どこの戦場へ行っても死ぬんじゃないよ、互いに頑張ろう」と励まし合って病院を後にしました。

そして翌日から医務室勤務でした。高級軍医から次のように一言挨拶があった。「半年間の病院

での衛生兵の基礎的勉強ご苦労だった。鶏で言うなれば卵がヒヨコになり今は青年位かな。これからは一つ一つ自分の研究と努力でどんな患者の命でも救えるようにして欲しい。また医務室の勤務は曹長より区割りがあるから、終わり」と。十七人は明日から医務室が職場である。

私が中隊に戻ると人事係の准尉が私を待っていた。「実は呼んだのは陸軍病院の成績を伝えたかったので、君は三十二人中三番で、医務室では事務室勤務だと連絡が来ている、良く頑張ったな、これからも元気で一生懸命にやってくれ、お目出度う」と、准尉も我が部下の思わぬ好成绩に安心されたのだと思う。

いよいよ今日からは医務室勤務である。朝八時過ぎに「体の調子の悪い者、診察や治療を受けたい者は廊下に集合」と呼び廻りましたところ、内科六人、外科六人が集まり、引率して医務室に入りました。私は内科の順番を取り、先に外科の治療を始めました。小さい虫刺されが化膿した者や

打撲傷が多く、打撲傷にはイヒチオール湿布、また化膿には消毒して軟膏カリバガーゼを傷中に挿入し、当てガーゼをして終わる、という具合に正確に行いました。

医務室は連隊中の患者が治療や診断に来るところです。軍医の診療による患者は中隊の衛生兵が助手となり、カルテの記入、処方箋も切るなど馴れるまでは大変な事でした。とくに軍医が話す言葉を総てカルテに記入して置かねばならないからです。そして診察、治療は総て午前中に終わるよう順序よくやらねば、私には事務室での次の仕事が山積みとなっている訳です。

昼食を終えて早目に医務室へ入り書類の整理、報告書の作成を行います。各中隊の月例身体検査の集計表（グラフ）や連隊全部の表の作成、初年兵・二年兵・三年兵等の区分表の作成などですが要領さえ覚えればとても簡単でした。

五月のある夕方でした。日曜日でも私は医務室

で仕事を終え中隊へ戻って来ました。すると同年兵が私を探していました。尋ねると「実は兵隊が一人、両手を顔面に当て、顔中血を流しているからちよつと見てやってくれ」と言うことです。

「どうしたんだ」と問いたですが患者は一言も口を割らない。取敢えず医務室に連れ込み傷口を診て「これはヒドイ、縫合した方が早くよくなる」と考え、日直上等兵に縫合のためのヘアン鉗子二丁と縫合糸・針を借り治療室に戻りました。

まず器具の消毒をし、患者の傷口を見た。そして患者に「どう言う訳でこんな傷を負ったのか」と尋ねると「風呂から夕方帰って来ると、中隊の玄関口に入ったところで、『貴様態度が悪いぞ』と言って木銃を持って来て、私の前頭部を一撃した途端、眉の上から血が吹き出して来た」という話でした。生まれて初めての人体の縫合であるが果して上手いだろうか、人間の皮膚の厚さは如何程だろうか。傷口付近には髪の毛が無いか良く調べて傷口の消毒にかかった。

一度は必ず縫合位はできなければと、慌てずに落ち着いてやるのだと自分に言い聞かせながら、ヨーチンで消毒しアカチンキを貼布し、傷口の上から下の傷口へ釣針のように曲がった針で両端をひっかけシツカリ結んで切った。流石鉗子は物を挟んだら絶対強い力である。五箇所と五針縫い、両縫目を鉗子の頭で平面になるように軽く押さえ、縫合は終わった。そして傷口に小さく当てガゼをし絆創膏で止め完了した。感無量の出来事だった。

それから医務室が主に私の勤務場所でした。時には中隊の行軍では、私は救急患者収容のために肩から背負う赤十字マーク入りの鞆に若干の薬品、包帯を入れて列外を行き、落伍者の処置をするのであった。

毎日午前中だけでもいろんな患者の治療にあたった。まず多いのが靴擦れである。靴の中で蒸されて汗をかき、臭いにおいがして来る、これが

皮下蜂巣識炎に移行する。一番悪性で軍隊では多い病気です。ほかには虫・蚊・南京虫などに刺された患者もいます。また不潔にして傷が大きくなった者、放置しておいた為に大きくなった者もいる。

一方、医務室にも面倒臭いと思いいヤイヤ治療する衛生兵もいれば、汚い臭いと思う者もいます。私は衛生兵が好きだし、毎日、傷跡には肉芽組織が生えて来るのを見るのが楽しみで、患者にその様子を伝えて、回復への力を与える事の喜びを味わえることは何とも言えないものでした。また中には瘍という患者もよく見掛けたが、これは一般の衛生兵では治療は勿論、その薬の使用を知らない者がほとんどだった。私は高級軍医より密かにその手解きを授かっていた。

私は日中はほとんど医務室で過ごし、点呼後は毎日不審番と共に兵隊の寝相や熱病者がいないか、窓の開閉はどうかと兵舎の巡回も積極的に行った。

ところが五月末だったと思う。私は医務室の事務室で平常通り忙しく仕事をやっている、私の机の前に突然高級軍医が立っておられるのに気が付きました。「ハッ!」と思い、立って一礼しました。軍医は私に「この度この書類が届き、衛生兵一人を要求して来た。相手が軍司令部の軍医部なので誰でも良いという訳にはいかず、医務室内で人選したところ、君が都合が悪くなければと言う事になったので、まず一番に君のところへ来たのだ。一度書類に目を通して、急がなくても良いから返事をしてくれ。それに君は衛生兵としても良く勉強した。また事務もとても計算が早く奇麗なので感謝しているし、患者にもとても親切だと皆の評判も良いので医務室としても惜しいのだが、軍司令部へ行ったら頑張ってくれ」と言っている。バインダーに挟んだ秘密の書類を私の机の上に置いて帰って行かれた。

私はおもむろに書類に目を通すと、転属先は仏領印度支那のサイゴン市にある「仏領印度支那駐

屯軍司令部軍医部付」とある。私は軍司令部へ勤務できるので胸がワクワクして来た。「よしここだ、私は絶対ここへ転属するぞ」と改めて覚悟を決めて、早いけど高級軍医に返答してしまおうと軍医の部屋をノックした。「早いと思います私が私は覚悟を決めました。また家の方でも両親の他に男三人兄弟の私は二番目で、下に女四人いますから家の支障はありませんから是非決定をお願いします」と、軍医に話しました。

「もう取消しはできないよ、両親に話さなくても良いのか」「もう自分で決めていきます。お願いします」「では引き受けたが、中隊へ帰っても転属命令が出るまで黙って話さないようにしてくれ」、そして再び「今まで良くやってくれた」と礼を述べられました。

五日夜、九時の点呼後、班長は「本日の連隊命令を達する。陸軍衛生上等兵松塚喜代隆は本日付をもって仏領印度支那駐屯軍司令部軍医部に転属

を命ず。依つて出発は後日連絡するから不用品物は早目に被服係に返納し、必要物はまとめて被服係から連絡が有るから」と言われた。その後は全員が私の所に集まつて「松塚何故連隊で君一人だけだ。前から話があつたのか。仏領印度支那とは一体どこにあるのだ、南かニューギニアの方が」などという。

そして二日後、人事係の准尉からは「仏印へ転属の命令が出たそうだが、どうせ遅いか早いかわりには、皆も南方へ行くだろうが、君は軍司令部という一般の兵は滅多に勤務できない所だよ、しっかりと健康に注意して頑張る事だなあ、それから只今から外出を認めるから二泊三日、両親や弟妹と心行くまで話して来い、公用腕章はこれだから班長に一言言つてな」そして腕章を戴き、昼には家に向かった。

電車を乗り継いで南越線に乗り換え、自分の村の駅に着くのを待った。村の駅に着くと駈け足で両親の家へと向かった。近所はほとんど勤め人

で、昼間は留守である。玄関の戸を開けて「母さん、元氣か」と呼ぶと台所から「誰？」と返事があつたが出て来ない。再び「母さん！」と呼ぶと「誰ですか」と言いながら母が顔を出した。

玄関口に軍服姿でいる私を見つめてビックリした顔で「何じゃお前か、お父さん、喜代隆が来たんだけど」父もビックリ顔で「何しに来たんだ、こんな普通の日に。まあ家の中へ入つてゆっくりして話そう」となった。私は自分の二階に昇り軍服を脱ぎ、そして私は両親に「実はこの度選ばれて南方の仏領印度支那の軍司令部軍医部へ転属となった。連隊よりは衛生兵は俺一人だけだ。実は人事係の熊野准尉の計いで二泊三日の外泊をくれたので帰つて来た」事を話した。

そして両親の親戚では四人も召集で最近入隊された事を聞かされた。夕方三人の妹達が仕事から帰つて来た。この一カ年余り、日曜祭日には必ず母か妹達が、母の手製の重箱に詰めた弁当を持つて必ず連隊へ面会に来てくれたお礼を述べ、そし



て夜の更けるのも忘れて語り合つた。そして昼から風呂に入るやら御馳走を食べるやら、近所へも顔を出すやら、同じ村にいる父の弟二人にも別れの顔を出したりして、二日、三日はアツと言う間であつた。私が南方へ行くという話も近所の方の耳に入っている様子だつた。

私は弟と妹には「お昼までに中隊に入るように家を出る。両親の面倒だけはしっかり見てやつてくれ。また兄貴三人は元氣でいるが、男はいつ召集されるか分からないから、女と言えども良縁があつたら自分で嫁入りしてくれ、即ち、自分の人生は自分で選んでくれという訳だ」と聞かせた。しかし、それでも現在、長男は戦死、三男は復員したが病気がちで、結局普通より早く亡くなつた。

二晩を思いもよらず楽しく過ごした私は、心残り無く両親と別れ、再び南越線の汽車に乗り故郷を後にした。そして衛兵所前で、一カ年余り過ご

したこの連隊とも、三、四日後には、再び戻れない南方へ転属して行くのだと思つた時、何だか淋しさが込み上げて来て「もう再びこの連隊の土を踏む事はできないのだ」と考えた。

お昼だったので人事係の准尉もおられて「准尉殿、只今戻りました。両親及び弟妹も大喜びで准尉殿のお陰だと申しております。有難う御座いました」「どうせ帰つて来なければならぬから早く帰つて来てよかつただろう。少しづつ身の廻りの準備をして置く事だな」と言われた。自分は班へ戻つたが全員留守だつた。

夕方になると全員が班に戻つてきて、班内は平素と変わらない賑やかさになって、再び私の外地へ出発の話が始まつた。「両親達と別れを惜しんで来たか。親戚へも顔を出して来たのか」「何故君が一人選ばれたのか」「仏領印度支那つて支那の一部か」「連隊から何人出発するのか」「何日出発するのか」などと、その後も毎日、そんな話をもたれていた。

六月二日夜の点呼後、班長より呼び出しがあった。室内には班長ばかり六人おられて「松塚、そこへ掛けよ」と云い、班長達と顔を合わせながら、一カ年余りの話の中で、班長達が衛生兵の入学試験と卒業時の成績までよく知っていたのに驚いた。最後に班長は「二日後の四日午前八時、衛門近くの桜の木の下に集合、連隊から他に下士官一人と兵四人と君の六人が出発し、豊橋の中部軍司令部に出頭し、そこで隊を編成して目的地に向かうということだった。「豊橋から先の事は連隊では分からないが、遅れないように、体を大切に頑張ってくれ。班長と一年余りの付き合いだったが、大体は要領が良く、人の面倒をよく見てくれたな。惜しいけれども命令だから仕方ない事だ、それだけだ」と言ってくれた。

准尉が「ここから両親に、明日朝出発することを電話しておけ」と連隊の電話を貸してくれ、両親と最後の別れの言葉を交わした。その夜はなかなか眠れなかった。そして一年余りの軍隊生活で

患者の面倒をいかに見るかということ、教わった人体解剖で私も必ず内臓まで手を差し入れて命を助けたい。それにはもつと勉強し沢山の患者と接したい、そして弾の飛んで来る中で「衛生兵！」と呼んでいる患者を探したい、などと考えて、ほとんど眠れぬままに夜が明けた。

起床喇叭と共に点呼が済み、背囊や帯剣を付け、いつでも出発できる準備を整えて玄関で待機していると、出会う者が「元気でな、体を大切に」と口々に励ましてくれた。班長や同年兵が来て「松塚、出発だ」と言うとなんとなく「万歳！万歳！」の聲が方々から上がった。私は営門の付近で連隊から出発する五人に合流した。中隊の准尉と高棹曹長が私に「何もやる物が無いが、これを受け取ってくれ」と万年筆二本が入った包を戴きました。私達は別れを惜しみ、衛兵の進軍喇叭に合わせて足音も軽く行進して行った。

駅に入り、汽車に乗り汽車の車窓を開けた。私

は鯖江連隊とも最後だが、再び日本に帰って来られるかどうか……とも考えた。そして汽車は「万歳、万歳」の声で発車した。私は両親のことが思い出されて、豊橋の司令部へ入るまでほとんど無言のままだった。それには私一人が衛生兵なので六人の中ではちょっと違った感があつたかも知れない。

午後四時、私達六人は豊橋の軍司令部の門を潜り、ここで初めて同行の皆の前で転属の挨拶をしました。そして、ここで久保田曹長を隊長とした三十人の小隊が編成されたこと、中には下士官四人、衛生兵一人、兵二十五人である事を発表されました。それから暫くの間は、体を鍛えるため司令部の周囲を走ったり、体操したりしている中に、互いに気心も分かり合ってきました。

六月二十五日朝八時、隊長は初めて「廊下に全員集合」の命令を出され、「只今より緊急連絡を伝える。実は昨夜宇品港に我々が乗船する船が入港した。何としてもその船に乗り込まなくてはな

らないので全員九時にここを出発する。直ちに完全武装でここに集合すること。行きたくない者は来なくて良い。念を押すが九時出発だぞ、分かつたな」と。一同は走り自分の部屋へ散り、十五分後には私は赤十字の腕章に赤十字の鞆を肩に集合した。

三十分過ぎ、隊長は「集合！」の号令を掛け、列外には下士官と衛生兵の私があった。「よし、トラック二台に分乗して駅へ向かい出発だ」。トラックは駅へ到着する。切符を買わずに汽車に乗るのも初めてだ。

列車は米原を通過して京都、大阪方面に向かう。三輛目までは軍用列車で、私の車輛は軍人が三十人と少なく、一般の乗客とも乗り合いで乗車している。「〇〇婦人会」との襷を掛けた人が、兵隊の乗った列車にお茶のサービスをしている。汽車は瀬戸内海を左に見て宇品港に向かっていく。隊長は「早ければ午後六時頃には乗船を終わりたい」と話していた。

汽車は宇品で一般乗客を降ろすと、列車はそのまま埠頭の貨物積場まで着けてくれた。隊長は即列車から降りて船の船員と打合せをしている。海の方を眺めると、三〇〇メートル位沖に停泊している一隻の船は、すでに盛んに兵隊を積み込んでいる。兵たちがタラップを列になって上がり、一方の埠頭には一個連隊もの大きい一団が乗船を待っている。隊長が戻って来て「三十分位待つて欲しい。場所は一番下の船庫のエンジン近くだ」と言う。一連の兵隊たちの一団がタラップを昇って行くのを見て私は「あの兵隊たちは一体何を考えているだろう。この中には戦死して小さい箱の中に入って帰る人もいるのだろうに。私は司令部要員だから命は大丈夫だろうか」などと考えていた。

我が隊の乗船の番となった。時計は六時三十分を過ぎていた。「早く、早く」と船員達は一生懸命である。タラップを昇りドアを通ると、船内

は、何階もあるビルの上から下まで垂直に見下ろせるようで、そこには柱は一本も無い。下まで降りるのに、水が渦を巻いて下に降りるような階段や仕切りの無い階段がある。考えて見ると、例えば魚雷を受けても、船が沈没する前に甲板へ逃げられるし、人を詰め込むにも間仕切りが無いので楽である。そして床には、藁を敷くだけで簡単に寝転ぶことができると思った。

船は午後七時過ぎまでかかって人員を積み込んだ。六月も二十日を過ぎれば昼の時間は長く明るい。私達は一番船庫のエンジンの近くに入り、七時二十分、船のエンジンが動き始めた。外は薄暗く埠頭の電灯も灯った。船は動き出し、私は甲板へ昇って宇品港の最後の灯と、そして遙かに両親に別れを告げた。

先に停泊していた僚船は我が船の先二〇〇メートルを走っている。一体どこまで一緒に行くのだろうか、二隻とも仏印の方では？ と考えていた。私は出港してからずーっと埠頭の灯を眺めていた

が、灯が小さくなりこれで最後だと諦めて部屋へ戻った。渦巻状階段だから人に「御免」と言わなくてもぐるぐる回れば自分の場所に入れる。すぐ横になり第一日は終わった。

宇品港を出帆したのは昭和十八年六月二十五日夜、二十六日午後四時頃に頭上を戦闘機が五、六回旋回し、時には翼を振りながら南の空へ姿を消した。隣の兵隊が言うのには「檄を飛ばしに来たんだよ」と教えてくれた。ここでは珍しい光景を見ました。大人二人乗りの丸木船でバナナを積んで来て、六、七メートルの竹竿の先につけた籠に房のバナナを入れて、甲板に向かって「兵隊さん、バナナ一房、タバコ交換」と呼んでいる。軍隊タバコの「ほまれ・誉」を入れる兵隊もおりました。

夕暮になると僚船と共に薄暮の中を出帆しました。隣の下士官は先に走っている船は「安芸丸」、この船は「三池丸」で、僚船は、この二、三年内に造船された三五ノットも出る最優秀船だ。「エ

ンジンの音が軽いだろう」と話してくれた。南国の夜空は星が沢山瞬いて、とても奇麗だが、果して日本ではこんな美しい夜空を眺められるか、七月七日の七夕は、と子供の頃を思い浮かべた。

夜中の海はサッパリ方位が分からないでいると、班長が「松塚衛生兵、波が静かで船が揺れず、酔いの患者も出ないので安心だな。しかしこんな日ばかりでは無いよ。きっと大嵐の日もあるからな」と言っていた。隣の問仕切りのところにいた下士官と話合った。

「どこから来られましたか」「俺達は新潟県でほとんどの兵は農業で両親がいて嫁、子供もいるんだ」「君は」「私は福井県で現役兵で入隊して、原隊には一年二カ月程勤務して、この度南方へ転属となりました」「それでは現役のバリバリだね、そして何方の方へ」「南方仏印軍司令部軍医部へ転属になりました」「なんだ立派なところへ転属だ、何人か」「衛生兵は私一人だけです」「よく採用されたものだな。いや立派、立派」と心から喜

んでくれた。

私はまた「班長殿はお気の毒ですね。両親の他に奥さんや子供さんを置いて心配でないですか」「心配しても召集だから仕方がないけど、子供が一番可愛いよ。そして今度の戦争は場所が広いからな、どこへ行くのかさっぱり分からないよ。この中の者は俺と同じ環境のよく似た者が殆どだよ」と言っていました。

夜が明けた。私は目覚めが遅く、朝食はなかったが、お腹が空いた感じもなかった。昼食は少し食べた。

午後三時頃になると、また飛行機の爆音がしたので甲板に出た。猛暑の甲板は満員で四方は海また海で、島一つ目に入らないが、友軍の戦闘機一機が私達二隻の船の頭上を七、八回旋回して東の方へ去って行った。例の班長は「どこか分からないが島が近く、我々船団も少しの辛抱だな」と言っていた。

それから二十分位船は走ったろうか、港の出入

口には、約四〇隻の破損した船が、出入りする船の邪魔にならないと思うように、船首を水中に出したり、船首を上にしたたり、また横腹を出したり、マストを海中にしたり、沈没しているのを見て、戦争の凄まじさを痛感した。

その時、仲間が「隊長が下船だと言っている」と連絡にきて、私は隣の班長に「ここで仏印行きの方に乗替えます」と言い、軍装を整え、衛生靴を肩にタラップを降りた。そして点呼を取り、忘れ物がないか点検して歩き出して埠頭を眺めた時には、もう「三池丸」と「安芸丸」の姿はなかった。